

他者とかかわり合うことで、豊かな発想で読書に親しむ子の育成

— 5年 読書活動と国語科「友だちと一緒に、本を紹介しよう」の実践を中心に —

I はじめに

II 本年度の実践

- 1 読書活動
- 2 情報活用
- 3 図書館運営・連携

III 今後の課題と問題点

第19分科会
メディア・リテラシー教育と文化活動
A-2 情報教育、学校図書館教育

福永 えりな （岡崎・山中小）

研究の概要報告（読書・学校図書館）

第 72 次教育研究愛知県集会には、12 本のレポートが提出され、読書活動を効果的に、学校図書館を有効に活用するために各分会で熱心にとりくんだ実践が報告された。

「自ら本を手に取り、読書に親しむ児童生徒の育成」「調べた情報を根拠にして自分の意見や考えを発表することができる生徒の育成」「主体的に図書館とのかかわりをもつことができる生徒の育成」など多様な内容が寄せられた。その中で、読書の喜びや楽しみを味わわせ、読書意欲の向上をはかる読書指導の実践が報告された。また、自らの課題について主体的に情報を収集し、学校図書館を積極的に活用した調べ学習の実践や、魅力ある学校図書館をめざして、より利用しやすいものにするためのとりくみも発表された。

読書活動においては、友だちと読書の楽しさを味わうことができるような授業実践や図書委員会を中心とした図書館づくりの有効性が報告された。また、さらに読書がしたくなるように、児童が自ら物語づくりをしたり、友だちどうしで本を紹介し合ったりする場の設定も報告された。さらに、ブックトークやビブリオバトルは、読書を主体的な活動にするために関連していることが確認された。

情報活用については、学校司書と連携して学習資料を活用した授業にとりくみ、情報発信の場を設けることで、相手に応じて表現を工夫する力を高める実践が見られた。国語科や生活科と関連させて、情報収集することで授業展開やワークシートを工夫し、ICT 機器を効果的に活用していた。そのことで、適切に情報整理を行うことができ、情報活用能力を高める実践へとつながった。加えて、タブレット端末やさまざまな思考ツールを組み合わせることで、課題解決能力の向上に、大きな効果があることが確認された。

図書館経営・連携については、読書に親しみ、すすんで図書館を利用する子を育てる図書館経営、図書資料とタブレット端末の利点をいかした実践、主体的に本とのかかわる実践などが報告された。図書室の魅力に気付ける機会を設け、図書室の便利さや読書の楽しさについて、再認識をはかったり、図書資料とタブレット端末のそれぞれの利点をいかしながら、図書環境を整え、魅力的な図書館経営をめざしたり、図書館をより居心地のよい場所にするために有効であった。

図書の活用では、リテラチャーサークルの手法を使って、教科の中で読書活動をめざした実践、料理を題材にした読書を通して、「おもてなしの心」を育てていった実践が報告された。自分の役割を意識したり、自他ともに大切にできる態度を培ったりして成長した様子が確認できた。

今後も、ICT 機器と図書資料の両立をめざしながら、学校司書や地域の図書館と連携をはかるなどし、学校図書館がよりいっそう充実した場所になること、読書が子どもたちにとって豊かな人間性を育むものとなることを切に願う。

(宮武里衣・菊池直)

報告書のできるまで

10月15日、愛知県産業労働センターにおいて、県集會が開かれ、「読書・学校図書館」の分科会では、第71次教研までの成果と課題をもとに、子どもたちの心を豊かにする読書教育の推進について活発に討論が繰り広げられた。司会者や教育課程研究委員の適切な支援と、助言者の明確な指導を得ながら、多くの成果を収めることができた。

この報告書は、県集會での提案とその討論の内容をまとめたものである。ここに至るまでに、助言者をはじめ、関係の諸先生方にご指導いただいたことに深い感謝の意を表す。

助言者	宮武 里衣（愛知学泉大学）	菊池 直（名古屋・稲永小）
教育課程研究委員	水野 徹（名古屋・東築地小）	籾 大貴（海部・大治小）
	白形 奈穂（岡崎・北中）	野杵 友美子（名古屋・藤が丘小）
	遠山 友加里（一宮・木曾川西小）	杉本 梢（豊田・寿恵野小）
	今井 舞（尾北・城東中）	安井 智奈美（名古屋・明德小）
	平松 亜弥美（豊橋・八町小）	

I はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものといわれている。テレビ、インターネットなどのさまざまな情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化などにより、子どもの「読書離れ」が指摘される今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせるとともに、読書を通して豊かな心を育てていくことが求められている。

今後ますます情報化がすすむことで、多種多様な情報の中から、自分たちの生活に必要な情報を収集し、何が有効な情報であるかを取捨選択し、課題を解決する力を培うことも必要となってくる。そのためには、「情報・学習センター」としての学校図書館の整備・充実をはかるとともに、自らの課題解決のために情報を収集・選択して活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

また、本を介して意見や感想を交流することで、人と人がつながりを持ち、心を通わせていくことも求められている。子どもの読書量は、学年がすすむにつれて減少してきているのが現状である。子どもたちは日常生活の中で、テレビやゲーム、SNSでのやりとりで夢中になり、人との関係が希薄になってきている。こうした子どもたちに読書による人との間接体験をもたせたり、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人とかかわりのよさを感じさせる上で有効であると考えられる。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は、次の3点であると考えられる。

- 読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
- 友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割
- 利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

地域によって差はあるものの、法律の改正により学校司書の配置がすすめられ、司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。現代社会に生きる子どもたちが、多くの本と出会い、自らの課題を解決することで、現代文化を見つめ直し、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

II 本年度の実践

1 読書活動

1 はじめに

読書は、一生涯を通して楽しみ、学ぶことのできるものであると考える。岡崎市が提唱している「岡崎子ども読書活動推進計画（第三次）」を見てみると、小学生の不読率（1か月に1冊も本を読まない人の割合）は下がっておりよい傾向に見えるが、その一方で、高校生など年齢が上がるにつれて不読者が増えているのがわかる（資料1）。詳しく見てみると、「他にしたいことがあったから」「他の活動で時間がなかったから」

など、読書が一時的なものになり、一生涯を通して楽しむことからはかけ離れていることがわかる。しかし、わたくしはおとなになって読書の魅力に気付いた。それは一人で静かに読む楽しさと同時に、読んだ本について仲間と話をしたり、それらを通して交友の場を広げたりすることに喜びを感じたからだ。『他者とかかわり合う』ことで、新しい視点で楽しむことができた。新しい世界を知れたりすることを実感した。だからこそ、6年間を通じて『読書に親しむ』学習を行う小学生のうちに、仲間と物語について共有し、一人で静かに読む楽しさに加えて、仲間とその世界観を共有することの楽しさを味わってほしいと考えた。

また、学習指導要領解説の第5学年及び第6学年の内容には、「日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと」と書かれている。「気付く」と表記された読書の分野において、『他者とかかわり』が重要になってくるはずだ。岡崎市立根石小学校が行っている毎日の担任の読み聞かせや読書活動を通して子どもたちは、『仲間と意見を交流できる楽しさ』を感じている。本学級が1学期に行ったビブリオバトルでは、実践前後を比べたときに、「一人で読んでいるときよりも本が好きになったし、みんなのことが知れた」と、仲間とかかわったからこそ気付いた様子であった（資料2）。

そこで今回は、『仲間とかかわり合いながら』行う読書を軸として実践し、国語力や人間力などの人格を形成できる＝『教養的読書』と、おとなになっても読書に親しむ＝『娯楽的読書』のきっかけとなるような新しい読書の形を検証していきたいと思い、本実践をとりくむこととした。※『教養的読書』『娯楽的読書』：（新読書指導事典 坂本一郎著 より）

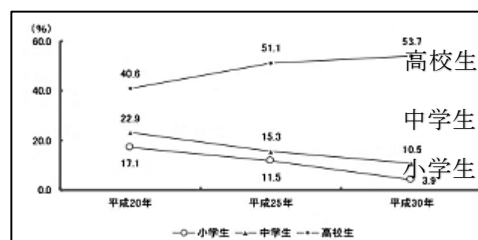
2 研究の構想

（1）研究の仮説

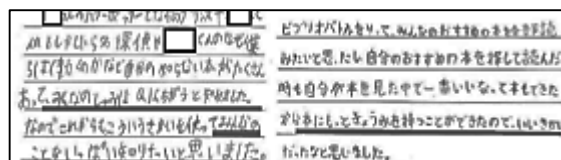
子どもの実態に合った『つながり』を意識した本を読む読書活動を設定し、他者の考えを受け入れたり、自分の考えを膨らませたりする活動を行えば、子どもは豊かな発想や新しい視点をもって読書を楽しむことができるだろう

※『つながり』とは

5年生国語科『友だちといっしょに、本をしょうかいしよう』の単元にて、子どもにつけさせたい『言葉の力』である。ここでは、「本と本のとつながりを見つけることで、本を読むことがより楽しくなり、新たな本にも出会うことができる」と書かれている。



【資料1】1か月に1冊も本を読まなかった（不読者）の割合



【資料2】本学級1学期の実践『ビブリオバトル』での子どもの感想

(2) 研究のてだて

I 子どもの実態に合った『つながり』を意識した本を読む読書活動を設定

(ア) 子どもの実態に合わせた本、作者の選定・精選

今回は、『仲間とかかわり合いながら』『本と本のつながり』を意識した読書活動を行うべく、くすのきしげのりさんの本を中心に授業を展開していきたい。理由は以下の2点である。

① 子どもの実態に合っており、『仲間とかかわり合いながら』とりくめるということ

本学級で1学期に実践したビブリオバトルで一人の子どもがくすのきさんの『三年一組、春野先生!』(講談社)を紹介していた。この本に惹かれた子どもも多く、そのときチャンプ本(子どもが選んだ人気の本)に選ばれた。くすのきさんが元教職だったこともあり、子どもが理解しやすく、また気持ちをゆさぶられるような作品が多いことも子どもの実態に合っている。

② 『本と本のつながり』を感じやすいということ

くすのきさんの作品に登場する人物は複数の本に登場するなど、『つながり』を意識した作品づくりを行っている。このような本のつながりは、子どもの豊かな想像力を生みだすだろう。学習の中で複数の本のつながりを意識しながら、想像力をもって読書に親しむ子どもの姿を期待したい(資料3)。

また今回は、くすのきさんとアポイントメントが取れ、本学級に動画メッセージをいただけることとなったため、子どもの意欲を高められるように活用していきたい。



【資料3】くすのきさんの作品
(出展:くすのきしげのりHP)

(イ) 『つながり』をさらに意識するためのサイドストーリー制作

くすのきさんが描いた作品から得た想像力をいかして、仲間と新たな物語(サイドストーリー)を創作する活動を行う。発展的な活動であるが、ただ感想を言い合うよりも、もとの作品を読んで感じた考えを仲間と共有することができ、もとの作品と関連した物語をつくることで、より『本と本のつながり』を感じることができるだろう。

II 他者の考えを受け入れたり、自分の考えを膨らませたりする活動を設定

(ウ) 他者とかかわり合いながら自分の考えを広げるための『ペア活動』

創作活動は2人組でタブレット端末アプリの学習支援ツールを使って行うこととする。3人以上のグループ活動にすると、どうしても意見が偏ったり、観客になったりする人も出てくるため、活動が円滑にすすむように2人とした。大人数では参加しきれない子どもも、2人組でお互いに意見を交わしながら創作することで、自分の考えを広げることができると思う。

(エ) さらに多くの仲間とかかわり合いながら自分の思いを伝える『ビブリオバトル』

ビブリオバトルとは、それぞれお気に入りの本を持ち寄り、決められた時間で紹介し、どの本が最も読みたくなかったかを投票で決める活動である。目的である「人を通して本を知る、本を通して人を知る」を活用し、今回は自分たちが創作した物語を紹介することで、自分の考えを他者へ伝え、他者の考えを自分が受け入れることができるだろう。そして新しい視点をもって読む読書の楽しさを味わわせたい。

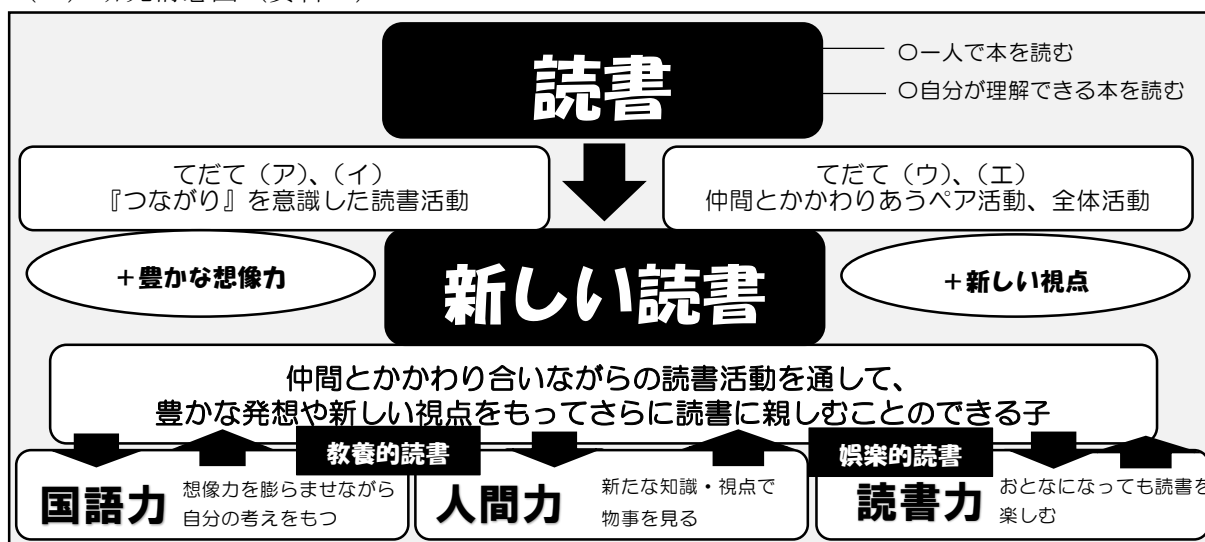
(3) 子どもの実態・抽出児

A: 自分の考えが常にはっきりしており、他者の意見を受け入れることが苦手である。自己肯定感も低く、自分の考えは他者に受け入れられないと感じることもある。

B: 物語を書いたり、意見をノートに書いたりするのは好きだが、自分に自信がないため、授業では相手の意見を聞いて終わってしまうことが多い。

【資料4】抽出児の日頃の様子

(4) 研究構想図 (資料5)



【資料5】研究構想図

(5) 研究の実際と考察

【子どもの実態に合わせた本、作者の選定・精選 てだて (ア)】

2学期に入り、1学期のビブリオバトルを振り返ると子どもたちは「またやりたいね」と話し始めた。ビブリオバトルを通してたくさんの本に出会えたことに喜びを感じている様子であった。そこで、チャンプ本に選ばれた、くすのきさんの『三年一組、春野先生!』を改めて紹介する。この本がシリーズ本であることを全体に話し、それに食いついてきた子どもたちに、くすのきさんは『つながり』を意識した作品づくりを行っていることを伝えた。そして、つながりがあることを示すために、『おこだでませんように』(小学館)と『ええたまいっちゃん!』(岩崎書店)を読み聞かせした。『おこだでませんように』で登場する主人公は、『ええたまいっちゃん!』で、主人公にアドバイスする警察官として登場している。そのことに気付くと、子どもたちは「他の本も読んでみたい!」と声をあげた。

次に、岡崎市立中央図書館と連携して集めたくすのきさんの本を読み、『くすのきマップ』と題して、登場人物の相関図をつくる活動を行った。子どもどうして話しながらマップを完成させていく。自分たちでつながりを見つけ、それを形にしていく楽しさが表情からもよく表れていた。Aは、「先生、きっとこの後、この人の子どもが活躍する話がまた生まれるよ」と意気揚々と話しており、他の子どもたちも「そしたらこの話に登場した場所も出てくるかな」と乗っかって対話することができていた。まさに『仲間とかかわりあい』養われる『想像力』が見えたようであった。(資料6)そこで、「くすのきさんの話を自分たちのオリジナルの物語でつなげてみよう」と提案すると、子どもたちはやる気を見せ、てだて(イ)へ繋げることができた。



【資料6】子どもたちが作った『くすのきマップ』

【『つながり』をさらに意識するためのサイドストーリー制作と

くすのきさんからのビデオメッセージ てだて (ア) (イ)】

『くすのきマップ』と同時進行で、くすのきさんとリモートでのアポイントメントをとった。くすのきさんは現在、「絵本・応援プロジェクト」を立ち上げ、日本中で講演を行ったり、絵本のすばらしさを発信したりする活動を行っている。本学級のとりくみを伝えると、たいへん喜

んでくれ、快くインタビューに答えてくださった。絵本作家になろうと思ったきっかけや、なぜつながりのある本を書こうと思ったかなどインタビューさせていただいた(資料7)。そして、子どもの意欲を書き立たせるために、本実践のサイドストーリー制作のもととなる本、『三年一組、春野先生!』の制作秘話と本学級へのメッセージをいただいた。



【資料7】インタビューの様子

後日、子どもたちにサイドストーリーづくりの説明を行った。今回は、①中心人物を自分で決めること②二人組で制作すること③物語の『起・承・転・結』の部分のみをつくることの3点を伝えた。そして制作活動に入る前に、くすのきさんのメッセージを見せた。「自分の名前を書いて自分の思いを込めたら、その時点であなたたちは『ぼくは作家です』と名乗ってよい。未来の作家がたくさん誕生することを願っています。」というくすのきさんの言葉に、子どもたちは資料のように活動に対して意欲を見せた。また下線部のように本に対する作者の思いを身に染みて感じているようであった(資料8)。A、Bもそれぞれ今後の活動に意欲的な様子で、授業が終わった後ももとの本をもう一度手に取り読んでいた。

T1 : 制作活動を行うにあたって、ある人からメッセージをもらっています。
 C : 誰? 校長先生?
 T2 : …くすのきしげのりさんです!
 C : ええ〜! すごい! やったー!
 T3 : この学級だけにメッセージをもらったよ。
 —動画視聴—
 T4 : どう思いましたか?
 C1 : 『ぼくは作家です』って言っている。
 A : 早くつくりたい!
 C3 : 絵本づくりはたいへんそうだけど、楽しそう!
 C4 : 『(登場人物) 一人ひとりがみんな大切だからつながりのある本を書いている』って言っている。
 T5 : じゃあみんなで作家デビューしようか!
 B : つくりたい!

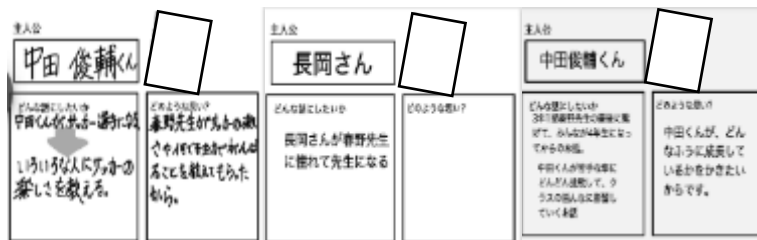
【資料8】活動前の導入 TC 表

【『つながり』をさらに意識するためのサイドストーリー制作

他者の考えを受け入れながら自分の考えを広げるための『ペア活動』 てだて (イ) (ウ)】

① 中心人物を決める

まずは、自分の思いを整理するために個別で中心人物を決めさせた(資料9)。どんな話にしたいのかを書き出させると、すでに個性豊かに発想している子や、一方で



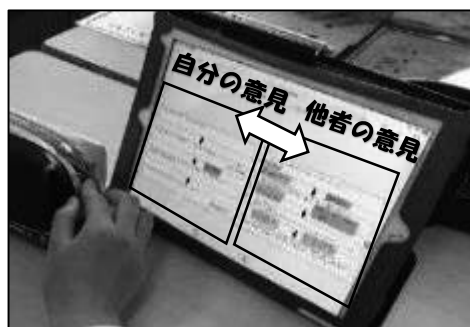
【資料9】個人計画シート

悩んでいる子もいた。個別の意見をもとに、同じ中心人物をあげているペアや話の流れが似ているペア、話し合いでの発言力や発想力のバランスがよいペアなど意図的に組み合わせた。

② 二人組での制作 ③物語の『起・承・転・結』をつくる

個人追究として、物語を起承転結に分けてつくらせる。物語を考える+起承転結に分けて書くという活動は難易度が高いため、導入としてまずは起承転結の意味を理解させることから始めた。誰もが知っている物語を起承転結に分けることで、物語で最も伝えたい山場が『転』の部分に当てはまることなどを理解できた様子であった。

起承転結を理解したところで、自分の考えた物語を4つに分けていく。個人追究した後にペアでの共有、話し合いに進めていくため、お互いの考えを簡単に見比べることができる学習支援ツールを活用した(資料10)。予め配付していたシートに合わせて、子どもが考えを書き込んでいく。その際、この話で読者に何を伝えたいか、

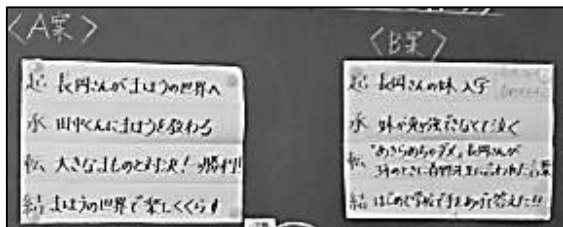


【資料10】学習支援ツールの比較機能

願いを書くように伝えた。ただ漠然と書くのではなく、もとの本である『三年一組、春野先生！』を読んでどのようなことを感じたのかという思いを込めることが大切だと、くすのきさんから助言をもらっていたため、もう一度くすのきさんの動画を見せて考えさせた。

仲間の意見と比べるようながすと、自分と同じ意見や異なる意見があることに気付き、そこから自分たちの表現したいことは何なのかを試行錯誤している様子であった（資料11）。

Aの意見に下線部(C1)のように賛同している様子や、Bのペアのように似ている意見を照らし合わせることで、充実した話し合いが進み、意図的にペアをつくったことの有効性が感じられた。一方で、物語をつくる活動を主とすると、『つながり』への意識が少し薄れてしまうようだ。そこで、『つながり』について全体共有する場を設けた。予め担任が用意した二つの案(A案とB案)を提示する（資料12）。



【資料12】教員が用意した例

A案はファンタジー性があるが、『三年一組、春野先生！』のサイドストーリーとしては一貫性がなく明らかにつながりが見えてこない。一方のB案には、前作に登場する人物の妹が登場し、春野先生に声をかけられる場面があるなど、随所につながりが見えてくる。子どもたちは二つの案を提示され、即座に「B案がいい！」と発していた。その理由を話しているうちに、人物、場面、伝えたい言葉の『つながり』が入っているとよいことに気付き、ペア活動を再開した。資料のように全体共有後のペア活動では『つながり』を意識して話していることがわかる。全体共有でペアだけでなく、学級の仲間ともかかわり合うことでより豊かな発想と新しい視点で読書に親しむことができた。

(エ) さらに多くの仲間とかかわり合いながら自分の思いを伝える『ビブリオバトル』

ペアの仲間とのかかわり合いにより、一人では想像できない視点で考えることができ、よりこの本の楽しさを感じる事ができたようである（資料13）。抽出見をはじめ、すべての子がワークシートに自分の思いや想像したものを

A : がんばって書いたから読んでみて。
 C1 : いいね！面白い！私のと似てるどころ多いね！

B : 二人のをまとめるのどうしよう？似ているから…
 T : 「起」と「結」をまず決めてみようか。
 B : 私の「起」とC2の「承」がつながりそうじゃない？
 C2 : 本当だね。じゃあ「結」はこれでいいね！この部分は入れる？どうする？

ペア活動①

(一度作業を止め、全体共有の場)
 T : みなさんには願いの部分も書いてもらったよね。この本にける願い。ペアの子と見比べてどうですか。
 A : みんなあきらめずにがんばって特訓すること。
 C1 : 私と似ている！
 T : つながりも意識したいよね。悩んでいるグループもいるみたいなので、みんなで話し合ってみようか。先生ストーリーを2つ、A案とB案でつくってきました。みんな聞いてもらってもいい？

全体共有

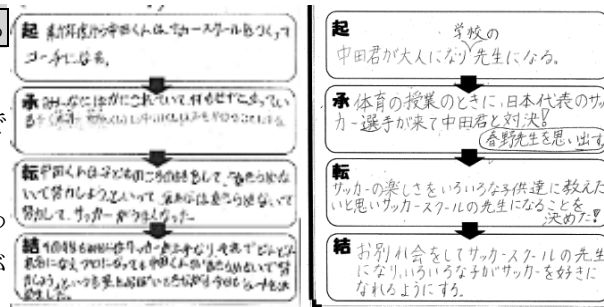
(A案、B案を説明)
 B : (B案発表後、拍手する)
 T : どう？どっちがつながりありそう？
 C : A案は面白いけど、つながってはいないかな。
 A : 春野先生の言った言葉がB案には出てくる。
 C : 学校という場面でのつながりがある。
 C : 春野先生の願いがつながっている。「諦めない」を引き継ぐ。
 T : なるほど。B案にはそれがあるね。じゃあ、本と本のつながりを考えるにはどうしたらいい。
 C : 内容や場面、伝えたい言葉「がんばる」みたいな。

(ペア活動再開)
 A : つながりも大事で山場も大事だよ。「転」で春野先生に話してもらおうよ。
 C1 : いいね。そうしよう。

ペア活動②



【資料11】てだて(ウ)の検証TC表とその様子



【資料13】子どものワークシート

ぎっしりと書いていた。Aは仲間に認めてもらうことで、自分の想像力は間違っていないと自信をもった様子であり、Bもこの活動終了後に、「楽しかった」とつぶやき、くすのきさんの他の作品を自ら手に取っていた。

そんな子どもたちの溢れ出した発想力を他へ伝え、本の面白さを共有する楽しさを味わわせるために、最後にビブリオバトルを行った。ビブリオバトルでは、自分たちのつくった作品を紹介すると同時に、もとの本の注目ポイント(この人物、言葉、場面に注目して、もう一度読んでみてほしい)を伝えるように指示した。タブレット端末で絵を描き紹介する子や、4コマ漫画を使う子など多種多様な紹介となった(資料14)。



【資料14】ビブリオバトルの様子

どの発表にも子どもは前のめりに耳を傾けており、自分と同じ条件でもこんなにも異なる発想で本が楽しめるのだと実感した様子であった。単元終了時には、Bは以下のように感想を述べていた。

自分だけでは気づけなかったことも〇〇と一緒にストーリーをついたら、たくさん見つけることができた。仲間のも面白かったので、別の本でもやってみたい。

(6) 成果と今後の課題

てだて(ア)(イ)により、子どもは本の世界に入り込みながら、自分の考えを膨らませることができていた。それはくすのきさんの作品のもつ『つながり』の力や本人からのメッセージがあったからこそであり、子どもがより楽しく読書ができる環境をもたらした。またサイドストーリーの制作活動を取り入れることによって、もとの作品の内容を読み込んでいることもうかがえた。そして、そのときに感じた思いを形にすることで、豊かな発想力があることを実感できたと考える。その証拠にワークシートに書かれたくすのきさんへのメッセージには次のように書かれていた(資料15)。本を読むことが少なかったAであるが、このてだてを講じることで、本と本の間をつながりを感じながら読むという新しい読書の楽しさを味わうことができていた様子だった。

〇〇は、本と本の間をつながりを感じながら読むという新しい読書の楽しさを味わうことができていた様子だった。

【資料15】実践後の抽出児のメッセージ

Bは実践後もくすのきさんの別の本を読み、読書を楽しんでいた。

てだて(ウ)(エ)により、一人では考えつかなかった新たな視点で物語を楽しむことができた。今までは聞き手の立場のみにいる子も多くいたが、てだてを講じることで一人ひとりの考えがしっかりと形成され、それらを聞き手として受け入れながら、話し手として自分の意見を発信することにつながった。「読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと」という読書活動の内容に沿った実践となり、このてだての有効性があったといえる。

3 おわりに

今回のてだての有効性をより感じるために、作家を限定した『本と本の間をつながり』だけでなく、同じテーマの『つながり』を通して、本の楽しさを仲間と共有することで、さらに一生涯を通して読書に親しむ子の育成がはかれたと考える。そのような機会をまた設け、これからも継続して検証を続けていきたい。今日、デジタル化や他の娯楽が発展し、読書離れが問題視されているが、この新しい読書の形をさらに研究し、おとなになっても純粋に読書を楽しむことのできるような子どもの育成につとめていきたい。

2 情報活用

図書資料やタブレット端末と思考ツールを組み合わせて情報整理を行った実践が報告された。

3 図書館運営・連携

オンライン検索と貸出を整備した実践や、さまざまな委員会活動やポップ・ポスターづくり、読書記録の作成など、「読書センター」としての機能を高める実践が報告された。

4 図書の活用

リテラチャーサークルの手法を用い教科の中で読書指導を行った実践や、料理を題材にした本を用いて「おもてなしの心」を育てていった実践が報告された。

Ⅲ 成果と今後の課題

本年度の県集会では、学校や地域の図書を活用し、本への関心や楽しさが高められ、ゆたかな学びを実現することをめざした実践や、さまざまな人と連携をしながらよりよい読書環境の構築をめざした実践が報告された。

目的に合った本を選書したり、主体的に情報収集を行い、活用したりする活動を通して、読書に対する価値を見出すようにながした実践が報告された。

図書室へ訪れる機会が少ない子どもたちが、主体的に図書館にかかわりがもてるように、魅力ある図書館づくりを工夫した実践が報告された。

タブレット端末と本を併用し、子どもたちの主体的なとりくみをうながす実践の報告もあった。

これらの実践報告をもとに、選書の仕方、学級や学年、全校への意欲の高め方など、活発な意見交換がなされた。

タブレット端末の活用について、学習支援クラウドの発表ノートでグループワークを行い、意見交換ができること。「絵本ひろば」では、興味に応じた絵本を選択できるので、何を読みたいか困っている児童にとって絵本が選びやすくなること。「フォーム」で、読みたい本のアンケート結果がすぐに出せることなど、各校でのとりくみが紹介された。

また、学級文庫の運営について、委員会の生徒が月に十冊と学年の先生が十冊選ぶ方法。学期ごとに、学年で入れ替える方法があることなどが紹介された。

今後に残された課題は以下の3点である。

- (1) 図書にどのように出会い、人生にどうかかわるか。国語科以外の教科や、教科横断的な活動の中で活用していくための工夫
- (2) 図書館活用に対して、学校図書館司書や司書教諭だけではなく、教科部や学年部など、学校全体で行っていくための工夫
- (3) 発達段階や小中のつながりを意識して、「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動を通して、豊かな心を育てていけるようなとりくみを続けていきたい。